



ドイツ、クラシック音楽、 女性の作曲家たち —ファニー・ヘンゼル、クララ・ シューマン、エミーリエ・マイヤー—

文学部 鈴木 康志

仕事上、最近裁判を傍聴する機会がありました。法曹界においてはすでに当たりまえなのかもしれませんが、裁判長も検事も女性で少し驚きました。ジェンダー平等が遅れていると言われる日本ですが、多少進歩している分野もあるのではないのでしょうか。

さて、ドイツと言えば、まずクラシック音楽、バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス、ワーグナー、マーラー、ブルックナー、シュトラウス、シェーンベルク等々思い浮かべるだけでも切りがありません。その肖像画が、小学校や中学校の音楽室の壁を飾っていたドイツの作曲家たちです。しかしこれらの作曲家はすべて男性です。クラシック音楽の国ドイツに女性の作曲家はいないのでしょうか？ クラシック音楽に詳しい方であればファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル（以下ファニー）、クララ・シューマン、あるいは

アルマ・マーラーを思い浮かべるかもしれませんが。しかし彼女たちは作曲家としてよりは、作曲家フェーリクス・メンデルスゾーンの姉、作曲家ローベルト・シューマン、グスタフ・マーラーの妻としての方が有名です。しかしファニーは、弟フェーリクス以上に才気あふれる女性で、フェーリクスの名で出された「無言歌」の幾つかはファニーの作曲であったようです。ただ、女性であったがゆえに、芸術家より、女性として生きるように父から諭され、そして父の死後は弟フェーリクスから作曲家への道は押さえつけられます。しかし画家の夫ヴィルヘルム・ヘンゼルとのイタリア滞在の後、弟のしぶしぶの了解を得、作曲家への道を歩もうとしていた、まさにそのとき脳卒中で亡くなってしまいます。42歳にもみたくない人生でした。歴史にifはないかもしれませんが、あまりに突然の死で、生きていれば素晴らしい作品をもっと多く残したのではないかと思います。なお、敬愛する姉の突然の死はフェーリクスにとっても大きなショックで、フェーリクス自身も同年に亡くなってしまいます。天才モーツァルトの再来と言われたフェーリクス・メンデルスゾーンもモーツァルト同様30歳代で亡くなってしまいます。

さて、クララ・シューマンは音楽教育家の父ヴィークからピアニストとしての徹底した英才教育を受け、19世紀の最も有名なピアニストの一人になり、作曲も手がけました。1800年



ファニー・ヘンゼル
(1805-1847)



クララ・シューマン
(1819-1896)



エミーリエ・マイヤー
(1812-1883)

代の前半ヴィーク家には、ほぼ同年のメンデルスゾーン、シューマン、ショパンなどロマン派の面々が集いました。なかでも父親ヴィークの反対を乗り越えたクララ・ヴィークとローベルト・シューマンの結婚はロマン派を象徴する出来事でした。しかし8人の子供を抱えたクララは、シューマンの死後、ブラームスの援助を受けながらも、家計のため演奏家としてコンサートに明け暮れなければなりません。ここがファニーとの違いですが、やはり作曲には専念できませんでした。でも素敵なピアノ曲を残しています。

ところでみなさんは、女性ベートーベンと呼ばれたエミーリエ・マイヤー（1812-1883）という女性をご存じでしょうか。実は私も最近まで詳しくは知りませんでした、多分それは私だけではないと思います。例えばエヴァ・リーガ著『音楽史の中の女たち』（思索社）、小林緑編著『女性作曲家列伝』などでもマイヤーは女性作曲家として取りあげられていません。日本はもとより、ドイツですら忘れ去られていたわけです。しかし彼女は多くのヴァイオリンとチェロソナタをもつ9つの管弦四重奏曲や歌曲、コンチェルト含んだピアノ曲を作曲しています。これだけでもファニーやクララと同列に置かれるべき存在です。ところがマイヤーはそれだけではありません、「器楽の頂点として、まったく男性的とみなされ、ベートーベンの後継者においても、その独自の主観を表す巨人としてのジャンルである交響曲（FAZ, 21.05.2022, S.12より）」を8つも作曲しているのです。最近、入手可能なマイヤーのCDを購入して交響曲の1番から5番まで、ピアノ協奏曲、弦楽四重奏曲などを聴いてみましたが、聴きごたえのある素晴らしいものでした。なぜこれだけの音楽が1883年の彼女の死後すぐ忘れ去られたのでしょうか？ 一つにはマイヤーの音楽スタイルがモーツァルトなどの後継としてのロマン主義的擬古主義で、19世紀後半のリヒャルト・ワーグナーやその信望

者たちには古臭く感じられたことがあるようです。そして女性であったことも顧みられなかった大きな理由だったかもしれません。しかし今彼女の音楽がルネッサンスを迎えています。あのバッハですら一度は忘れ去られ、ファニーとフェーリクス・メンデルゾーンによって再評価されたのです。日本でもマイヤーの交響曲が演奏される日がくるかもしれません。

19世紀ドイツの女性作曲家たちファニー・ヘンゼル、クララ・シューマン、エミーリエ・マイヤーは、女性であるがゆえに創作には制約を受けたり、忘れ去られたりしましたが、その中で素敵な曲を多く残しました。ジェンダーの視点から彼女たちの人生を見ることも興味深いですが、バッハ、ベートーベン、ブラームスといったあまりにドイツ的、あるいは男性的なクラシック音楽だけでなく、女性たちが作曲した曲に耳を傾けてみるのもいいと思います。

お勧めの参考文献

山下剛著『もう一人のメンデルスゾーン ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼルの生涯』2010年 未知谷
荻谷由喜子著『クララ・シューマン』2019年 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス

Barbara Beuys: Emilie Mayer Europas größte Komponistin. Eine Spurensuche. Weilerswist-Metternich 2021.

引用

Jan Brachmann: Durchaus auch Symphonien. Der weibliche Beethoven: Barbara Beuys stellt die Komponistin Emilie Mayer vor. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung 21.05.2022, S.12.